

山本紀夫著『雲の上で暮らすーアンデス・ヒマラヤの高地民族の世界』

40 年前から通算 10 年にわたってアンデス、ヒマラヤ、チベット、アマゾン、アフリカ高地に滞在し、高地牧畜・農耕民族の自然との関わり方・暮らしの工夫などの調査に当たってきた民族学者の現地での野帳記録をエッセー風に纏めたものである。著者は元々は植物学が専門で、高地での栽培植物の起源を調査するためにアンデスに入ったのだが、やがて興味の対象は高地民族学へ変化していった。

自然条件が厳しい高地に住む人々が長い年月を掛けて、その暮らし方を高地の環境にどのように適応させてきたか、その結果どのような社会規範や慣習が生まれてきたか、などを著者が体験した実例を踏まえて平易に描いている。

自給自足でつつましくかに生活していた 40 年前と、好むと好まざるとに関わらず現金経済の波を被るようになった近年の暮らしぶり、心の襞、社会構造の変化などが描かれていて興味深い。著者が属していた京大探検部の活動華やかかりし頃のエピソードも面白い。著者は「アンデス・ヒマラヤにおける高地民族の山岳人類学的研究」で 2006 年度の秩父宮記念山岳賞（日本山岳会）を受賞した国立民族学博物館（大阪）の教授である。

ヒマラヤでは、ナムチェバザールに近いクーンブ地方の小村に滞在して、元々はチベット出自の小集団でしかなかったシェルパ族（今でもネパール人口の 1% しかない）が如何にしてネパールに定着していったか、また、良きにつけ悪しきにつけ外国からのヒマラヤ遠征という行為が彼らの生活や考え方にどのような変化を与えてきたかなど、シェルパ族の民族学的調査については、同じ著者を編者とする『ヒマラヤの環境誌ー山岳地域の自然とシェルパの世界』（八坂書房）に詳しい。

アンデスやヒマラヤを訪れたことがある方々には興味深い 1 冊であろう。

ナカニシヤ出版 2006 年刊

[「山書の小溪」目次に戻る](#)

